



# 『さあ、森づくりへ』

## 集中コース夏の部開催報告

樹は、光合成をして栄養を作り出しているけれども、背が年々伸びていくので、枝を伸ばし葉を増やさないと大きくなれない。だから、常に枝が伸ばせる空が必要。空間を測るのは困難なので、木と

木の距離と、樹の高さを目安に、森をみつめて…。

「そのために、まず、樹を知りましょうと、樹木分類」「直径を、樹高を測って、森の診断」・丸太を伐ってチェーンソーの練習。つる



梢をめがけて…

発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065  
 編集 早川清志  
 題字 島崎洋路

を蝶番に伐倒をしたら、枝を払って玉切り造材。「ウィーンチで寄せて集めて簡単集材」…三日間という時間の中に、あまりにぎつりと、詰め込みすぎたかもしれませんが…人が森を育むための、間伐。その一連を驚嘆みして放さず、あつちの森でこつちの森で、相対幹距比の森づくりを、是非。



大きな樹も なんのその



ほう、ホウ、朴



保残木、マーク!

集中コース 夏の部  
 7月30日(金)〜  
 8月1日(日)

一日目  
 8時30分  
 島崎先生の山小屋にて、  
 受付開始。

9時  
 先生方の開講あいさつ。  
 参加者の方々の自己紹介。  
 イントラ・事務局の自己紹介。日程説明。

10時  
 島崎先生から樹木検索について、簡単な説明を受けた後、小屋の横の林で樹木散策。樹の種類を覚えるには…検索方法に沿って…いやいや感覚的に…さて、あなたは?

12時  
 小屋にて昼食

1時  
 班分けの後、プロット調査へ。現場は、小屋のすぐ裏手の(旧)日影区有林。そこで20m四方の標準地毎木調査。胸の高さで直径を。梢を狙って樹高を。

2時45分  
 データ整理。相対的な、樹幹と樹幹の距離を、上層

4時  
 樹高との比率で…。二班とも10年後の上層樹高を25mと予測し、そのときのSRを20とすると、プロット内の保残木数は16本となった。

5時15分  
 先生方の講評、とりあえず一日目終了。温泉へ行くもよし、小屋のコウヤマキの風呂で汗を流すのもよし。

6時過ぎ  
 食材の準備が整い、小屋の前では、炭に火がつき、なんとなく交流会に突入。終了予定時刻は8時30分だけれど…。





輪切りから始めましょう

二日目  
8時30分

島崎先生の山小屋に集合。島崎先生のあいさつの後、体操をしてから現場へ。

9時

昨日のプロット内で、保残木をマーキングする。

10時

林道脇に丸太が積まれた土場にて、チェーンソーの始動方法と造材を班毎に。チヨークの位置でブルンと爆発、半チヨークで始動後すぐにスロットル開。造材は、体勢を整えて下刃伐りから上刃伐りに、まわし伐り。

11時

各班早くも伐倒方法の説

12時

土場に戻り昼食。昼休みに、近くのクヌギの樹に集まっている昆虫観察。オオムラサキやルリタテハなどの蝶・カブトやミヤマクワガタ・オオスズメバチもいる。

1時

伐倒再開。倒す方向の選択から受け口・追い口・つる。伐った木の枝を払って、玉切り造材。

4時15分

途中何回か休憩を取りながら今日の作業を終え、小屋へ。

4時30分

鳩吹公園の芝生の上で、チェーンソーメンテナンス。

5時30分

保科先生の講評、解散。

三日目

8時30分

島崎先生の山小屋に集合。先生方のあいさつの後、今日も体操をしてから現場に向かう。

9時

伐倒のつづき。今日も

しっかりと受け口・追い口・つる。

11時

「ひっぱりだこ」というウインチにアームが付いた機械で集材を体験。携帯型なのでどこでも簡単セッティング。意外と力持ち？

12時

土場にて昼食。昼休みを利用して、ぶり縄の特別講義が...



幌にて、小さな葉っぱ展覧会



悩ましげなS r

13時

ロギングトラクタによる集材を見学。車体に似合わず木の間を抜けて丸太まで。丸太を引き寄せたまま搬出してゆく。

14時

土場に戻り、島崎先生から、チルホールを使った伐倒の方法を簡単に説明して頂き、現場作業を終了。

14時40分

先生方の講評。これにて集中コース夏の部を終了。お疲れ様でした。

参加者/岩下さん、奥村さん、高橋(佐)さん、高橋(庄)さん、田口さん、内藤さん、長岡さん、中神さん、中村さん、藤田さん、宮島さん

講師/保科先生、島崎先生  
スタッフ/川島、後藤、早川、坂野

次回以降の予定

第九、十回  
8月28、29日(土、日)  
伐出

伐った木を山から出す事です。携帯型の？ウインチ付き機械で集材します。キャタピラやタイヤの林内作業車での搬出もしてみましよう。 8時30分、島崎先生の小屋集合。28日が島崎先生、29日が保科先生の担当です。  
なお28日・29日ともに、小屋前の鳩吹公園にて、「まほら伊那地球元気村」というイベントが開催され、多くの方が来園すると思われるますので、駐車場等ご注意ください。



第十一回 9月18日(土)

見学

山から切り出された材木はどんなルートでどこへ行くのか。  
長野県森林組合連合会の木材市場や建具屋さんの見学を予定しています。  
8時30分、島崎先生の小屋集合です。

第十二回 9月19日(日)

枝打ち

柱材の高付加価値化を目指すためには、間伐と枝打ちの「能動的」育林を...  
枝打ちの時期や方法はもちろん、「玄人の道具」もお見逃しなく。また木登りは自分で作ったぶり縄で。  
8時30分、島崎先生の小屋集合。担当は保科先生です。

# リレー通信

伊那谷に思う  
増井 啓治



朝は、空が白み始める前、伊那谷の大きさがじっと息を凝らすころ、鳥のさえずりが一段と増していく中で始まっていく。そして、朝の光が中央アルプスの将棋頭の頂を染めるころには、鳥たちも今日一日の生命の糧を求めて飛び立つのか、静かな時間を迎えることになる。すでに色濃くなったカラマツが山の

稜線まで駆け上がっていく姿が見えてくる頃に人々の生活も始まるのだから。  
伊那谷には天竜川を挟んで両側に河岸段丘がある。昔の集落は、天竜川に真近い段丘の下と中央アルプスの山麓部に並んで形作られている。これは、河岸段丘そのものは、中央アルプスの山地からの崩落土と御嶽山の火山灰で構成されているために、水持ちが悪く生活や稲作のための水が得られないからだということらしい。水田は、天竜川の両岸の低地帯では川の用水を利用して栽培され、一方山麓部では冷たい川の水や湧き水をいったん溜め池に引き、水温を上げた後に田に引き入れる方法で稲を栽培していた。江戸時代はまだレンゲの施肥効果が認識されて



いなかった時代であるので、肥料の原料はもっぱら草原の草と樹木の枝・葉と落枝・落葉であり、高級肥料として木首馬の厩肥であった。この厩肥を作るために当然毎日馬に草を与えることになる。飼料の草は春から夏まで河岸段丘の採草地で刈られて、馬に与えられる。このため河岸段丘部は樹木のない一面の草原となっていた。一方冬場の飼料としては、秋に集落一斉で山の採草地で一冬分の草を刈っていた。刈った草は屋根裏で保管され春までの馬の餌とされた。このため大面積の山の採草地が必要となり、山麓の集落から中央アルプスの稜線まで一面の草場が広がっていて、現在のような森林は見られなかったようである。例えば、霧が峰の草原が昔の草刈場であるが、それを思えば、山の一面の草場が想像できるだろう。草場の面積は田畑の面積の十倍から二十倍は必要で

枝が漉きこまれた。これは、刈敷と呼ばれた。これらの落枝・落葉や刈敷のためには、集落共有の入会地の山がその目的のために配置されていた。農業用の道具には木の材料が欠かせない。これらも山の木に頼っていた。農業生産以外に人々の生活には、燃料が必要となる。薪のためにナラの萌芽更新を利用した薪炭林があり、集落ごとに決められた林を十数年から二十数年のサイクルで循環させて薪として冬の初めに伐っていた。家屋の建設や補修のための材木や屋根の萱を得るための材料は、集落の裏に人工林を設けたり、営場には地味の悪いところにススキ原を作っていた。要約すると、以上見てきたように、農村の景観は、水の得られる地に集落があり水田と畑があり、そのまわりには一面の草場が広がり、山も稜線まで草地となっており、それらの景観の一部に樹木が点在す

あったといわれている。農業生産のために、樹木の落枝・落葉も重要な自然肥料である。また春の耕起のときに水田の土の通気性を上げるために樹木の

るといふ農業生産のために機能的に配置された自然景観が、江戸時代の伊那谷の景観であったといわれている。すなわち、人々は伊那谷の経済社会の中で、自然の恵みを最大限に利用し、現代人が見れば自然の破壊と見えるほどに自然を収奪して生活していたのである。しかし、昔の伊那谷の人々は自然を破壊し尽さなかった。人々は自らの生活を維持するために、さまざまに取り決めを定め、それを厳格に守ることで、一年間の草や樹木の成長量に見合った生産量を自然から得て自らの経済社会を持続していく知恵を併せ持っていたのであろう。

日本には「あとは野となれ山となれ」という廃棄物に関する困った言い回しがある。「あとは野となれ山となれ」というほどに、日本列島の自然は廃棄物を効率よく分解して、山や野の養分としてきた。「あとは水に流す」という言い回しも同様に豊富な水資源が汚れを薄めてくれて、また利用可能な水に戻るといふことである。自然の動物植物資源に頼っている限り、日本列島の自然条件はそれらの言い回しを可能にするほど豊かである。また日本語の自然という漢字は、「おのずとなる」という意味である。すなわち、自然はだれそれ創造したものでなく、自然自らが自分の力で出来上がったものである、という理解の仕方である。そこには、人間は自然の一部として自然の中で他の自然物と共存しているという考え方は生まれても、人間の自然に対する責任という考え方は生まれてこない。一方、西欧諸国においては、一神教の教えに従い、自然は創造主が作ったもので、人間は神との契約により自然を自らの目的のために自由に利用できるという考え方があつた。あるいはまた人間は神から自然の管理を任されているので、自然を正しく管理することは人間の責任であるという考え方がうまれてくる。一神教は、自然条件の大変厳しい場所、そして多民族の軋轢が大変激しい地で生まれている。日本に明治以降に西欧の科学技術文明が入ってきて、日本の経済社会を席捲したときに、日本人はいかなる自然観を持つことになったかは興味深いところである。私には、これもあるうに日本人は、これまでの自然観と西欧の自然観の、自分にとって「いいとこどり」をしたのではないか、と思われる。すなわち、日本人は自然と共生していく文化をもっているという過去の遺物を免罪符として、人間は自然をとことん

利用しつくしてもなんら問題はなく、また人間は技術により自然を管理することが可能であるという科学技術文明の哲学を掲げ、一方では人間の自然に対する責任という考え方には目を瞑ってきた、と思われるのである。

このようなゆがんだ自然に対する哲学が一般に広く普及したため、現代の日本人の自然に対する捉え方は混乱している。特に戦後の経済成長期以降には、都市部の重工業への人口の集中と農山村からの人口の流出のため、多くの人口の暮らす都市部から見えるものは、埋め立てられた海岸線であり、護岸された河川であり、大規模住宅団地として開発されていく都市近郊の丘陵地帯の景観であった。その一方で、人々は身の回りから自然が失われていくことに気づきはしていきが、本来の自然からかけ離れた日常生活から、求める自然というものがテレビに映される映像としての自然であり、観光の対象としての自然でしかなかった。ここに日本人の自然観は観念的な自然観であるという状況がみられることになった。美しい自然は守られなくてはならないが、日々の快適な生活はより重要なものとして捉えられ、現在に至っているのである。言い換えれば、現代

の日本人の自然観の特徴はそのゆがんだところにある、ということが出来る。例えば、公園の緑の芝生を見て、日本人は自然の豊かな公園と喜び、一方今のドイツ人は同じ公園を見て、グリーンアスファルトと呼ぶ。そこには、自然に対する理解の仕方において、二十年から三十年の西欧に対する日本の遅れを感じずにはおれない。

二十一世紀には、人間は自然とどのように付き合っていくことが求められているのだろうか。現在、地球の人口は、約六十二億人と言われている。二十一世紀半ばにはその人口は百億人にも達するという試算すらある。そのとき地球の人間社会は何を求められるのか。食料供給の問題、エネルギー供給の問題、森林資源の問題、環境の問題等々と課題は山積みである。これらの問題を考える上で、私は三つの重要な観点があると考えている。まず第一は、二十世紀の大量生産・大量消費・大量廃棄の経済社会構造と決別することである。二十世紀の驚異的な科学技術文明の進展は、その代償として二十一世紀に環境問題を負の遺産として残した。二十一世紀はこの課題にいか

に答えを出すかの視点で物事を判断していくことが求められている。そのためには、二十世紀型の経済社会構造と決別し、持続可能な経済社会を構築することが重要であると思う。第二は、現代文明は地球上のどこでも適用でき、世界をひとつのものとして捉える科学技術文明である。一方二十一世紀に求められるのは、それぞれの地域に根ざした固有の文化である。すなわち地域性と地域文化を重要視することである。二十世紀の経済社会は、飽くことなく利潤を追求する国際資本の思惑により、各地域の独自性は廃棄され、均一化を余儀なくされてきた。いわゆるグローバルリズム。これが行き着くところに二十一世紀の世界の安寧は期待できない。むしろ、各地域各国各地の独自性こそが将来世代に引き継ぐべき文化であるという観点が重要であると思う。第三は、合意の形成である。世界の各地域間の合意の形成、現代世代と将来世代の合意の形成である。南北問題という言葉が生まれてから久しいが、この問題が緩和されるどころか、ますます国内に限っても、都市と農山村のあいだには著しい富の不均衡が存在する。このような地域間の格差をいかに緩和していくかについて地域間の合意を形成していくことが重要である。また、現在世

代の要求をみだすことを目的にするだけではなく、将来世代の要求をも同時に満たすことが求められている。すなわち共に地球環境を共有する世代間の合意が形成されていく必要がある。私は、これらの三つの視点から二十一世紀の各種の課題を考えていくことが重要であると考え、三つの観点、すなわち持続可能・地域性の重視・合意形成から二十一世紀の森林の役割を考えていると、木材自給率十八%という数字が目につく。現在、世界の森林資源からの供給能力はその需要を上回る。そのため、日本の木材生産は、その価値どおりの価格を確保できない。そのため林野での労働賃金は不当に低い。各種補助金を投入してもこの状況である。これは今の現実である。しかし、私には将来の現実とは異なっているように見える。この地球の人口が急増し、温暖化をはじめとする気候の変動が到来し、今は地域により偏在はあるものの世界規模で見れば供給が充足している農産物が将来窮乏し、その日の水に事欠く多くの人が世界各地に増えてくるということが現実問題として起こってくれば、日本の農業・林業の価値ははからずとも向上し、その使命は人々の生存の必須条件となるであろう。そのときになつて、農林生産の拡大を図るのではなく、もう遅い。そのための準備は今の時点から必要である。日本農林業の知恵と技を蓄え、将来につなげていくことが今ももっとも求められている課題であると思う。

Kei

おわりに

台風十号の動きにどきどきしながら向かえた今回の集中コースでしたが、今年の酷暑そのままの暑い三日間となりました。



コラム

今年は雨も少なく、暑い日が続いています。梅雨入り宣言するまでは結構降っていたのですが、その後はサッパリ。昨年は雨の日が多く、涼しく、「このまま夏は来ないのか」という感じでしたので、大違いです。それでも暑いとは言ってもそこは信州の夏。日中はかなり暑くなりますが、夜はグツと冷えます。また、日中でも木陰に入れば涼しく、ジトジト感もありなし。他県から来られた人にとっては天国だったのでは？

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。

TEL 0265-70-7065  
FAX 0265-70-7994  
E-mail: ki-hayakawa@koanet.co.jp  
sh-sakano@koanet.co.jp  
携帯:090-4463-0062(開催日)  
URL http://www.koanet.co.jp

